

深彫り

杉本利男

吟遊社

杉本利男

深
彫
り

吟遊社

深彫り

一九九四年 八月二十五日 印刷

一九九四年 九月十五日 初版発行

杉本利男（すぎもととしお）

一九三八年 福井県生まれ。

著書 「錆びた十字架」

「うぶげの小鳥」（共に永田書房）

「渦外の人」「唐変木」（共に揺籃社）

「ジパングの風」

「ホワイト・パラダイス」（共に彩流社）

住所 〒183 東京都府中市住吉町2-30-31

住吉住宅 4-806

著 者 杉本利男

発行者 北村信吾

発行所 吟遊社

本社 東京都田無市本町四一四一十

編集室 武蔵野市吉祥寺南町一十一一六

電話 〇四二（四二）〇六五四

発売 星雲社

電話 〇三（三九四七）一〇二一

印刷 サトウ印書館

© 1994 Toshio Sugimoto Printed in Japan

定価 一八〇〇円

ISBN 4-7952-9408-9 C0093 P1800E

目次

深彫り……………	3
ブームの子ら……………	65
上がった女……………	127
末裔さんのお庭……………	167

深

彫

り

十二年前にも、今とよく似た感情に襲われたのを覚えている。巳年の年賀状を版画に仕上げるのは容易ではなかった。苦勞する割には図柄にアイディアが湧かない。

へその上主人公の蛇は、線の彫り加減が微妙に厄介なんだ

と岩野哲也は思った。太い線は弱々しいやぼったさとなって画面に息づく。一方細い線は蛇を完全に殺してしまう。その線を生かすにはまだ彫刻刀の腕が伴わない。蛇のどの部分に焦点をおくかも大問題であった。頭部だけに強い視線を投げかけると、綱のように流れる蛇の動きが止まってしまう。幾度となく彫刻刀を投げ出し、溜息をつく。これまでの自分の生き方そのもののように、哲也はふと思ってしまう。寺社の見慣れた絵馬の蛇の刷り物が、流れるように脳裏を掠めていく。

「ああ、ああ、一からやり直した！」

哲也は、思い切って版木を投げ出しながら呟いた。版木に荒い息を吹きかけ、再び彫刻刀を握る元氣は出てこなかった。眼鏡を彫り屑の上に無造作に置き、親指を両頬に添え小指を重ねた。残りの三本の指で眼孔を撫でている。くちや、くちやつ。湿った音が響き、指に生暖かい額の汗が流れて来る。疲労感が体内のあちこちからどっと吹き出してくる。

へ最初からじや、もう間に合わなくなってしまうなあ

今度はほとんど声にならなかった。

岩野哲也は五十歳を前に、遅まきながらカンリシヨク試験を受け、首尾よく合格した。実際に採用されるかどうかは、これからの成り行き次第だった。

これまでも歴代の何人もの校長に、管理職試験を受けてみるように薦められたが、一度もその誘いに応じたことはなかった。何人の教諭を受験させることができるかを、教育委員会は校長の力量の一部に評価しているらしい。校長は教職員に受験させることによって、受験者をそれとなく自分の陣営に引き込むこともできる。哲也は、校長のいろいろな肩叩きを狡猾な誘いかけだと受け止めていた。教頭候補者選考試験は四十歳から受験できることになっている。合格する平均年齢は五十前後だから、哲也が合格しても不思議ではない。哲也はそのような試験を初めて受験して、みごとに一回で受かってしまった。誰の目にも意外なことだった。合格した事実より、哲也が受験したこと自体が、予想外のことだった。

教職の世界に入った頃から、教頭や校長などの行政職に就きたいという哲也の野望は、同僚に比べてはるかに薄かった。特に振り出しが管理職試験の可否や、試験そのものに関係のない私立学校だったせいもある。公立の教職員は四十歳になり受験資格が付くと、迷うことなく受験態勢に入りゲームのように楽しんでさえいる。師範学校系の大学、私立各大学の教育クラブなどが、それぞれに競って模範解答練習会を開催している。専門学校もその部門の講座を開いて、かなりの営業成績を上げているようだ。

校長が受験者の学校経営、人事管理能力、人物評などを採点評価し、さらに複数の受験者がいる場合には、その順位を付けて教育委員会に具申する。試験の成績と校長の具申書のウエートは、半半の割合になっているとか。哲也はごく最近になって、こうしたことを知ったのだった。二、三年で私立学校の勤務をやめ、すぐさま公立学校に移ったのだが、そうした行政方面にはあいかわらず

関心が疎かった。非常識だと言われても仕方のない程、哲也には興味の持てる事柄ではなかった。三十年近い間、哲也は生徒たちの方にばかり目を向けて、上を見上げる暇も癖もなかった。その上体よく言えば、大学生の頃から関心を持ち続けている、我が国の中世美術史の調べものに没頭してきていたのだった。あつという間の歲月だった。

他の教員は年末年始になると、わざわざ校長や教頭を訪ねたり、いろいろな理由をつけて、教育委員会の有力委員のコネを探して回る者が多い。これまで高校では、小、中学に比べて、教頭や校長になりたがる者は少なかった。ようやく学校紛争の波が下火になり、世の中自体も安定してきた最近、高等学校でも管理職志向が少しずつ高まって来ているらしい。哲也の場合は、思想的に主張するものがあつて、頑固に行政職に反対してきたのではない。億劫に思つて行動しなかっただけである。そんな自分をむしろ礼儀なしだと考えている。

「世話になった人たちに、お礼参りの一回くらい、しなければいけないだろうな」

哲也は妻の萩子にそう言いながら、年賀状の版本をぼつぼつ彫っている。削り屑が膝の上に新雪のように少しずつ降り積もっていく。暖房の効いた湿っぽい空気が、縞状に揺らぐ感じだった。彫刻刀を押し当て、時々版木の上に勢いよく息を吹きかけている。

「いいのよ、そんなの。そんな虚礼に掻き回されることないわよ。そんなことより、大勢の卒業生が哲也さんの賀状を首を長くして待っているんだから、仕上げなくっちゃね」

子供がないせいか、萩子は夫をいまだに「哲也さん」と呼ぶ。結婚する前からの呼び方が、何十年もそのまま続いている。結婚してからでもそれ以前と変わったものは少ない。いつまで経っても、

ぱつとしなかった恋愛時代とあまり変りがない。

「年々賀状の枚数が増えて、一枚一枚絵の具で刷るのは大変な苦勞だよ。時間が掛かるしな」

「オリジナルをもって、うるさく主張してきたんですから、哲也さんの場合仕方ないでしょう。頑張るなさいよ、一年に一度のことですもの。やはり手造りは味わいが違うわよっ」

「年賀状を彫るのも、結局送り出した卒業生を一人でも多く、迎え入れるためのものだからな。まあ、言ってみれば授業の一環の、アフターケアさ。自分で勝手にそう思っているけど」

「哲也さんにとっても、生徒さんにしても版画の方がずっと大事よ。それでいいのよ。カンリシヨクの試験を受けた途端、方々に挨拶に出掛けるなんて、それこそおかしいわ。哲也さんは無器用なんだから、それで通すことよ。もう残りもわずかなんだから、迷わずにこれまで通りに……」

萩子は目を細め、背を丸めて版木と格闘している夫に話しかけた。

何十年も見向きもしなかった哲也が、珍しく管理職試験を受けたのには、それなりの理由があった。多くの時間や精神的な負担を受けてまで、教頭校長になろうなどとはごく最近まで思っていなかった。停年が音をたてて近づいて来るのを感じ取った時、これまで考えもしなかった思いが浮かんできた。どんなにきれいごとを言っているも、校長でなければ目的を達成できないことも沢山ある。世事に疎い岩野でも、世の中には予算がなければできない仕事意外に多いことに、ようやく気が付いた。それどころか世の中はすべて予算で動いていることを知った。予算の奪い合いこそが管理職者の能力発揮の場だと悟った。部下に仕事を与え、部下の能力を引き出して世に貢献させるのが、管理職者の腕の見せどころだと最近知った。管理職試験は想像していた程、大袈裟なもので

はないらしかった。次の機会にも是非受けようと哲也は考え始めていた。

「まったく我々を馬鹿にしていますよ、あんな問題を出すなんて……」

四十歳になったばかりの男子教員が、シケンを受けたことを誇るように言った。受験しても大方の教員はそしらぬ顔をしているのが普通なのに、自分より先輩の教員を出し抜いて受験した遠慮なのだろう、と哲也は単純に考えていた。受けてもおかしくない立場の人が、今年は一人受験できなかった。

「来年も君を指名するから、少し黙っていたらどうかね」

「でもあの問題は、やはり人を食っていますよ」

「あの問題を指しているのだな」と哲也は思った。

若い教員と久し振りに共通の話題を持たたことを、哲也は試験を受けたことより、その合否よりもずっと嬉しく思った。多くの場合、みんなは秘密裏に受験している。彼はどうして吹聴したがるのだろうか、と哲也はまだ拘泥していた。若くして受験したことを自慢するだけでなく、やはり出題そのものに疑問を抱いているのだと、哲也は感心している。

『自分のクラスの子女があなたに、あるいはあなた自身がそうした子女に、異性としての特別の感情を抱いた場合、あなたはそれをどのように解釈し、また行動しますか』

「岩野先生はどうお答えになったのですか」

「失礼だろう、君！ 岩野先生はすぐにも教頭になられる方だぞ。君とは年齢が違う」

四十歳そこそこの教員の肩を軽く揉みながら、赤ら顔の教頭が言った。教頭は酒を飲んだ時のように、首を赤くして豪快に笑った。

へどうして受験したことがバレたのだろう」

哲也は教頭職試験を受けたことを隠し続けたが、いつしかみんなの知るところになっていった。管理職に付いている教員以外は、岩野の受験を承知してはいないはずだった。否定して歩く程の問題ではないと即断した。

「教頭、教頭こそ失礼ですよ。ねえ、そうでしょう、岩野先生……？」

「岩野なら、京子先生に聞いて見て下さい。岩野京子先生にね。私はどうも、そういう愛情とか、愛憎問題は苦手ですてね」

哲也は自分でも、上手に身をかわしたものだと思つた。今まで燻っていた事柄が、霧が晴れるように解決し始めた。新卒の岩野京子なら、あの狡猾な二人に対して、自分にあり得る問題として、真剣に取り組んでくれるだろう、と考えた。岩野京子は自分に代わって、自分の立場を代弁してくれると確信して思つた。哲也はもう少しで自分の意見をとうとうと披露し、語り出すところだった。いつものように教頭たちが、自分を酒の肴にしているなどとは思ひもよらなかつた。若い教員が自分に相談を持ち掛けたり、話しかけてくれることを、哲也は密かに嬉しく思っている。明るさを忘れず、老いずにすむような気がするのだった。

このところ二年程クラス担任に付いていなかったから、四月に三年の学級担任を受けた時には、

これで卒業生を担任するのは最後になるだろうと思った。クラスの生徒たちは、同時に最後に送り出す卒業生になるのだとしみじみ思った。生まれてくる子供のことを、取りとめもなくあれこれ想像してみると、どこか似ていた。自分の年齢を考えてみて、学校にもよるが一年副担任、二年担任、三年副担任、一年担任、二年副担任、三年担任と一回りする余裕はもうないと思った。とうとうそんな時が来てしまったのだ、と淋しく切ない気持が心の中で勢いよく渦巻き始めた。

最初に担任を受け持った時の生徒たちとの関係は、他の場合とは何故か少し違う。いつまでも初恋の人を、心の奥深くに頼りなく仕舞い込んで置くのに、多少似ていると哲也は思った。初めて送り出した生徒たちからは、結婚の媒酌人を依頼されたり、離婚の相談を受けたり、返済のめどの立たない大金を借りに来られたり、いろいろ様々な話が持ち込まれる。哲也の方も何かと頼み事をする。引越しの手伝いから、家具や電化製品の購入まで、彼らの世話になり便宜を受ける。

へ岩野先生には何かとお世話になり……と言いながら、最初の担任をした生徒の保護者たちも、気楽に電話を掛けてくる。大学を卒業してから家業を継がせているが、一向に欲がつかず、自分の若い頃と違って、毎晩スナックや大衆酒場に入り浸っている、などと方々から愚痴の便りが届く。へそこでお願いですが……、ばったり出会った振りをして、意見してやって下さいよ

保護者が小声で付け加える。

気のよい哲也は正直構えて、責任を一身に感じてしまう。

へ私も嫌いな方ではないですから……

哲也はそう言って、次の日駅裏の大衆酒場に入って行く。哲也が入って行く時間は、学校の帰り

だからどんなに遅くても、六時半頃である。問題の青年は、父親の監視の下で仕事をしている時刻である。自由な時間があっても、意気のよい若者がそのような時刻にそのような店に、早々とは来ないものだ。哲也は教え子がまだ時間厳守の癖が付いていない、と一人勝手に苛立っている。

「三丁目の『巣造り建具店』の倅は、よく来るらしいね。少しは仕事に身を入れろって、オヤジさんからも説教してやってくれ。大事な跡取りだからね」

哲也は、炭火で鳥肉を焼いている店の主人の背中に話しかけた。主人は頭を傾け、反り返る格好で焼鳥に目を背けながら働いている。ぱたぱた、団扇をはたく音が心地よく響く。男の肩口や腰の辺りから、白い脂ぎった煙がもうとうと上がっている。

「こんな早くからは、いくら暇でもお見えにはなりませんわね。もっと遅くになってからですよ、倅さんが来るちゆうのは……。もっと派手なところへ行ってしまっているかもね」

主人は哲也が近くの公立高校の教員だと知っているので、不慣れではあったが丁寧で、妙な言葉使いをした。

「そうかね、それじゃ私がこうして、折角やって来た値打ちはゼロってわけだ」

哲也は肩を落して残念に思う。古本屋の本を手にして眺めていたが、気懸りだったのでそっと出て来てしまった。自分の仕事が残されているように思う。巣造り家具店の倅が来ない前に、哲也はすっかり上機嫌になっていた。あまり強くない酒を、世間話に載せて勧められるままにがぶがぶ飲んだ。酔っ払った哲也は、

「職場のこの近くに、泊まることのできるアパートでもあればなあ」

朦朧とした意識の中で思った。我慢しきれずに教え子が姿を現わす前に店を出た。

私鉄電車の中で酔い醒めの身震いをしながら、郊外の家へ戻るのは億劫なものだ、と哲也はつくづく思う。飲んだ時はことにそう思われた。

学級保護者会が開かれる日の朝、これまで所属の学年や部が同じであった時でも、あまり話かけてきたことのない、学年主任の山田一郎が、哲也にはに cand 様子で珍しく口をきいた。山田は禿頭で額が広く、辺り一帯を隈なく照らすという意味を込めて、生徒たちはずいぶん前から、彼にソコテラスとあだなを付けている。山田自身もそれをまんざら悪くは思っていない様子だった。

「岩野先生、クラスの保護者代表だけど、鈴木春江の母親はよしした方がいいね」

齒切れの悪い言い方で、押し付けがましい響きがあった。山田は四十五、六歳で、哲也が出た大の後輩だった。意欲を表に出す山田は、いつ頃からか哲也の上役になっていた。岩野はそのことを少しも気にしていない。山田の方もすまなさそうな口振りをしたことはなかった。

「クラスの役員は、今日の保護者会で父兄たちが決めるからね。僕は決まった人をお願いするだけさ。鈴木春江の母親だと、何か、山田先生に不都合なことでも……」

哲也の生真面目な言い方が、山田をいっそう苛立たせたようだ。そんなものはないが……と言いついて淀んでいる山田の表情を眺めながら、哲也は鈴木春江という生徒のことを考えていた。これまで二年間、春江に教科を教えたことがなく、データも手元にはない。どのような生徒なのか想像もつかなかった。学級担任になって一か月にもなるというのに、顔もはっきりと覚えてはおらず、これと

いった印象も受けていない。特にこれという個性のある生徒ではないことは、確かだと哲也は思った。山田の言い分が、かなり後々まで尾を引いていた。

「大抵は引き続き、役員を受けるからね」

「鈴木母親は、二年間私のクラスで役員を勤めたが、あまりやりたくないらしいんだ」

「わたしは聞いていないからね、そんな父兄の意向は何一つ……」

「だから私が代わりに、こうして……」

哲也は山田の擦り寄るような、執拗な言い分を耳障りなものに感じていた。

朝のホームルームの時、意識的に出欠の点呼をゆっくり取った。鈴木春江のところまで、もう一度名を呼び、挙手を求めた。春江はふくらとした頬に、大きめな瞳、後頭に目立たない褐色のビロードのリボンをしていた。漆黒の長い髪が一際輝いていた。

「先日の子だったのだ」

と哲也は目をみはらせていた。次の生徒の名を呼ぶのに少し手間取った。始業式の日、担任の形式的な挨拶と抱負などを述べ終えて廊下に出た時、一人の女子生徒がつかつかと追って来た。

「先生、先生の出身地はどこ？　もしかしたら北陸の福井でしょう、違いますか」

少女は大きな瞳を輝かせ、得意満面の表情で言った。大人の秘密を暴いた喜びを、全身で味わっているようだった。

「そう、福井だよ。どうして分かったの？」

三十年近く教員生活を送ってきたが、このような形で驚かされたことは初めてだった。

「なまりがあるもの！ いっぺんに分かる。母が叱る時のなまりにそっくりだわ」

少女の明るい表情は緩みつばなしかった。

「そうかね、すっかりなまりは取れていると思っていただけだな」

「それそれ、その、けど……って言うなまりよ。それにアクセントも……」

「そうかね、そりや参ったな。お母さんは向こうの人なんだね」

哲也は、大学生になるまでの二十年近くいた田舎での生活の一部始終を、すっかり少女に知られてしまったように思い、急に不愉快に感じ始めた。別段隠しだてするようなことは何一つなかったが、無理に暴かれた不快感があった。

「そう、越前の国府があったところですってね。紫式部もいたことがあるって、いつも母は自慢しているわ。私らとは何にも関係ないのにね、バカみたい！」

少女の顔に、ちよつと陰りが走った。

「きつと素晴らしい思い出があるんだろう。そつと聞いていてあげるといい」

哲也はますます気持が減入ってきた。自分もこの春江の母のように、田舎のことを自慢してきたように思った。

「母さんはそんなじゃないわ。それどころじゃなかったの。苦勞が重なって大変だったみたい」

春江は母を庇うように言った。自分の勲章を自慢しているような雰囲気があった。みたいだと言いながら、すっかりした自分の意見を持っているふうに感じられた。